

子どもたちのこと

大橋利恵子



「おはよう」と元気に声をかけると「おはよう」と元気な声かもどってくる。その時から、朝の家庭での忙しさも、後である研究会のわずらわしさも忘れて、お昼に食事をしてほっとするまで、夢中で子どもと過す毎日、そんな毎日がもう十数年も続いてきた。まだ十年と言う方もたくさんいらっしゃると思うけれど、されど十年！いつまで続けられるか、続けるのか？全身の力とびついてくる子どもを受けとめられなくなってきた体力に不

安を感じながら、先のことよりとりあえず「今」だ、「今」を大切にしないで……と心に言いきかせている。それにしても十年以上たって、わからないのが子ども、むずかしいのが子育て、でもかわいいのが子どもでうれしいのは子どもの成長と実感している。

わからないと言えば、何も言ってくれないK君をすぐに思いたす。K君は年少の頃はまだ慣れないから、おとなしい性格だからとしゃべらないこともそれほど問題にはならなかった。しかし、ある日、おかあさんいわく、「先生、この子は幼稚園ではしゃべらないことに決めたと言うんですよ」

「どうして？」

「さあ、はずかしいからだと思えますけど」

そんな会話の後、もう一度よく気をつけてみると、友だちと一緒にいるけれど、ほとんどおしゃべりを聞いている方だし、何か返事をしなくてはならない時には、友だちの方が、いろいろ聞くとK君は首でうなずいたり首をふったりして返事をするだけで話を通じるようにし

ている。教師もK君が近づいてきて何か言いたそうだとつい「〜したいの?」「〜ができたの?」などどこちらのほうか質問を連発して、K君が自分で言わなくても済むようにしている。家でもそうなら大変だと聞いてみると、まったく反対で、大きな声で話すし、自己主張も強いと言う。それなら何故?

それでも無理やりしゃべらせるわけにもいかないの、質問ばかりのかかわりが続けていたら、5歳児2学期になると、友だちには小さな声で少しだけ話をするようになり、そしてさらに、帰り道には大きな声でお当番のお母さんに話をしたりするようになってきたのである。5歳児の十一月頃にはみんな小学校に入る前のテストというのがある。お母さんに「名前が言えなくても、返事ができなくても気にしない心がまえでいた方がいいわよ。」能力がないのではなくて、K君の気持の問題なのだと言うことは私にもよくわかっていたので、そんな話をしていた。いよいよテストの日、何とK君は小さな声ではあったが、ちゃんと答えてきた。そして、その帰

り道、K君はお母さんに「小学校に入ったらちゃんとしやべるよ」と言ったそうである。事実、一年生の担任の先生と話をすると、チャンスがあり聞いてみると、活発ではないにしろちゃんと生活していると言う。

はずかしいからしゃべれなかった。そのうちにしゃべらなくても生活できるのでしゃべらないことにしてしまつた。でもやっぱり小学校ではちゃんとしよう。K君の気持はそんな風だったのだろうか？ 私がK君の心を聞ききれなかった。それは事実だと思う。でもいまだにK君がどうしてしゃべってくれなかったのか本当の所はよくわかっていない。なかなかしゃべれない子やほとんど単語でしか話をしてくれない子に出合うことはよくある。しかし、自分から「しゃべらないことにする」とか「小学校に行ったらしゃべる」とか宣言する子とはじめでだった。もしかしたら、そう宣言することがK君の気持にはずみをつけることだったのかもしれないなあと思つたり、とにかく元気に一年生になってくれたのだからそれでいいやと思ひなおして、心残りの自分をごまかし

ている。

さて今度は、やはり何よりうれしいのは子どもが成長したなと思う時だという話。誰でも一年経つと、わあ、変つたなと思えるものだが、特別に事情があつたり、障害があつたりした子がすすくと伸びてくれると大変うれしいものである。

S君は3歳の冬にげきの会などがきっかけで登園拒否が始まり、少し無理をさせたことで強度のチックになつた。保健センターへ相談に行つた母親は、家庭で親子でじっくり生活することをすすめられ、その幼稚園をやめた。そしてしばらくは家の中で過していたのだが、一人っ子のS君は当然のように、友だちを求めて近所の友だちの家に行つていくことが多くなつた。そんなに友だちと遊びたいのならと、母親は当園に入園できないか相談にみえた。しかし、S君自身は幼稚園には行きたくないのだから、すぐに喜んで来るはずがない。始めは好きな時間に親子で遊びに来ることにした。遊びにといつても母親はそばから見ただけだった。そのクラスには、

とても人なつっこい、誰にでもすぐ声をかけていくことができるT君という子がいた。T君はそんなS君にもまったくふつうの子と同じように声をかけ、一緒に遊ぶきっかけを作ってくれるのだが、少しかわるとすぐに帰りたいということが多かった。

ある日、T君たちと園庭で遊んでいる所にS君が来た。その日はよいお天気で気分もよかったのか、S君は教師と一緒にかくれんぼに参加してきた。しばらく遊んだS君はそれからT君と仲よしになっていった。教師とT君を手がかりにS君はだいぶ幼稚園になれてきたようだった。しかし、それは一時的なことだった。その日はじめてのプールあそびをするので、着がえの手伝いやら消毒やらでんでこま이었다。プールに入りたいような、でも入れないような気持だったS君は何かぐずぐず言ったり、のろのろしていたりした。気のみじかい私はおもわず、「さっさとしたくをしてね」といつもより少し強い口調で言ってしまった。そのとたん入ろうかなという気持はS君になくなってしまったようで、母親と

さっさと帰ってしまった。しまった！とも思ったし、あくあとも思った。しかし、ぐずぐず、のろのろしていは困る状態の中で叱ったわけでもなく、私としては早くしてねと言っただけなのに……。こんな小さなことだけで気持がくいちがって登園したくなくなるのなら、やはりそれはおかしい関係で安定した人間関係ではない。

夏休みの間、私はいろいろ考えた。集団の中に入れよう。他の子と一緒にしようと思はいつのまにかそういう意識を強くもってはいなかっただろうか。そしてさらに尊敬する大学の先生に「相手を自分がおおしてやろうという気持を持って接しているとだめなものですよ」と大変的確なアドバイスをしていただいた。そうだ、私はT君の力も母親の力もかりずにS君と私の間に信頼関係を作らなくてはならない。やりなおそう。

二期期になって、私は午後、S君と二人で遊ぶ時間もつようにした。ブロックをしたり、絵本を読んだり、S君とだけできるように。しばらくすると、S君はまた午前中に遊びにくるようになった。今度は本人の意志

で、この所が大切なのだと様々な学習をして気づかれたお母さんの変化と、S君と私の関係の変化といろいろなことがかさなりあって事は好転していった。ある日、家からザリガニをもってきてくれたS君に「どこにいるの?」「うちの横」「たくさんとれる?」「うん」「みんなどとりにいきたいね」「いいよおいで」ということになり、3、4日後、S君を先頭にみんなでS君の家までザリガニとりへ出かけた。その時のS君のうれしそうなお表情。帰りには園まで友だちと手をつなぎ、列にならんでわざわざ園までもどってこれた程だった。

その後、S君は徐々に長時間園で過ごすようになってきた。家もT君のすぐそばに引越して、午後もT君とよく遊ぶようになり、すっかり園生活になれていった。

四歳児クラスがおわり、五歳児クラスに進級したとたん、S君は自分から給食もたべ、みんなと一緒に登降園するようになった。今ではごく普通の一年生である。心配してS君とT君とを一緒の学級にしてほしいと小学校へ申し送ったがかいもなく、二人は別々の学級になっ

た。しかし、そんな心配は全くいらなかったことを知らされて、うれしい思いである。

一人一人の人生はドラマだよく言われる。確かに私自身だって人と同じようには生きていない。どちらかと言えば平凡ではない人生なような気がする。そして一人一人の子どもにだって、平凡にしろ、非凡にしろ、もうドラマが始まっているように思えるのである。一人一人の育ち、生活、人生をある時交わって生きていくことのおもしろさと大変さと……。

さて、明日の私の運命はいかに?

(岐阜北幼稚園)